

ボランティア・ツーリズムを通じた新たな都市・農村交流の可能性に関する研究

特定非営利活動法人 金沢創造都市フォーラム

1. はじめに

金沢創造都市フォーラムは、「都市の創造性」をキーワードに、金沢市をはじめ、石川県、北陸地方、さらに国内外における創造都市を中心とした地域のあり方を研究し、創造的かつ維持可能なまちづくりに役立てることを目的として、2002年5月に発足したNPO法人です（理事長：佐々木雅幸大阪市立大学大学院教授¹⁾）。創造都市とは、文化や産業における創造性を生かして問題解決を図る「創造の場」に富んだ都市をいいます。いつもは年数回の定例研究会を開催し、研究報告や情報交換を行っていますが、議論した成果の還元を図るため、不定期でシンポジウムなども開催しています。

今年度は、対象範囲を都市だけでなく、農山漁村との交流にまで広げ、「ボランティア・ツーリズムを通じた新たな都市・農村交流の可能性に関する研究」に取り組んできました。ボランティア・ツーリズムに関する研究は国内ではほとんど行われておらず、海外でも本格的な研究が始まったのは2000年代になってからです。そこで、社団法人北陸建設弘済会や北海道大学観光学高等研究センター、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の支援・協力を得ながら、研究を進めてきました。

2. ボランティア・ツーリズムとは何か

(1) ボランティア・ツーリズムの定義

ボランティア・ツーリズムは、無償労働を意味する“ボランティア”と、楽しみのための旅行を意味する“ツーリズム(=観光²⁾)”が融合したものです。しかし、“労働”と“余暇”が融合するというと、やや不思議な感じがします。なぜなら、これまで“労働”と“余暇”は相反するもの、つまり職場や家庭での“労働”によるストレスや疲労から逃れるための気晴らしとして、“余暇”の1つである観光が位置づけられてきたからです。その意味で、ボランティア・ツーリズムは余暇活動の中で労働するという、相反する要素が融合した不思議な観光形態です。

ボランティア・ツーリズム研究の第一人者である豪州の S. Wearing は、ボランティア・ツーリズムを「自由時間においてさまざまな動機に基づき、社会における物的貧困の緩和、援助、また特定の環境の保護や社会や環境の調査などの組織化されたボランティア活動」(Wearing 2001)と定義しています。しかし、この定義では、ボランティアと観光の要素が十分に反映できていないという意見もあります。日本で最初のボランティア・ツーリズムに関する研究といえる中村ほか(2008)によると、Wearingの定義には、ボランティアを通じて見出せる“自己実現”の要素や、観光の特徴の1つである“移動”の概念が含まれていないと指摘されています。この点については、海外の他の研究者も同様の主張をしています。このように、ボランティア・ツーリズムに関する研究は緒に着いたばかりで、研究者の間で広く共有された定義はまだ存在しません。そこで、ここでは取り敢えず、“ボランティア”と“観光”という最も基本的な要素を含んだ活動形態をボランティア・ツーリズムと呼ぶことにし、その特徴や効果を調査・研究することにしました。

(2) ボランティア・ツーリズムの誕生の経緯

ボランティアの起源は、19世紀の宣教師の活動といわれています。当時、個人がボランティアに参加する動機は、異なる階級間の格差を埋めることでした(Callanan and Thomas 2005)。ボランティアと観光の組み合わせという意味では、こうした活動をボランティア・ツーリズムの原型と考えることもできますが、より現在の形態に近い、組織化されたボランティアは、1900年代に設立された Australian Volunteers Abroad や The United States Peace Corp.によって始められました。特に、第二次世界大戦後

¹ 2010年5月の総会において、理事長が西端敏金沢大学名誉教授から交代した。

² 観光とは「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行うさまざまな活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」(1995年観光審議会答申)などと定義されるが、ここでは一般的に理解されている「楽しみのための旅行」と捉えた。

の復興に関連して多くのボランティア組織が設立されましたが (Tourism Research and Marketing 2008)、1年以上の長期にわたる活動が主流であったため、参加できる人びとは限られていました。

一方、観光分野においては、1980年代にマスツーリズムがもたらす弊害に対する反省が進み、“オルタナティブ・ツーリズム (もう1つの観光)” が提唱されました。その中で、エコツアーの1つの形として、1980年代半ばに英国で自然保護運動を目的とした海外での休暇が初めて行われました (Cousins 2007)。このツアー参加者を初期のボランティア・ツーリストと位置づけることができます。

その後、ボランティア・ツーリストが急増した背景には、米国や欧州、豪州で“Gap Year”と呼ばれる、一定期間仕事や学業を離れ、発展途上国などへボランティアに出かける20代の若者が急増したことがあげられます。これをきっかけに、2000年代に入ってからボランティア・ツーリズムという言葉が用いられるようになりました。しかし、先進国から発展途上国に行くことだけがボランティア・ツーリズムではありません。日本でも、富山県大山町 (現富山市) で1970年代から森林ボランティア活動である「草刈十字軍」の活動が行われており、ボランティア・ツーリズムの先がけといえます。それにもかかわらず、ボランティア・ツーリズムが新たに注目を集めているのは、活動の内容や目的地、期間などの選択肢が多様になり、より多くの人びとが参加しやすくなったからと考えられます。

(3) ボランティア・ツーリズムの類型

ボランティア・ツーリズムには、さまざまな形態があります。その中で、Callanan and Thomas (2005) が整理した「浅い (Shallow)」、「中程度 (Intermediate)」、「深い (Deep)」というボランティア・ツーリストの類型は、ボランティア・ツーリズムの多様性を理解する上で参考になります (表-1)。そこで、日本で行われているボランティア・ツーリズムの事例を、この類型に適用して考えてみましょう。

1つ目の事例は、有限会社海の種と提携したダイビングショップが、沖縄県読谷村で進めるサンゴ保全活動です。海の種は、「サンゴ礁を次の世代へ」を合言葉に、1995年に設立された養殖サンゴ苗の移植活動を行う社会的企業です (写真-1)。観光客はダイビングショップで参加申し込みができ、サンゴ苗代とインストラクター指導料を支払い、インストラクターの指示の下で作業を行います。作業に特別な技術は不要で、作業時間も半日と短いので、このためだけに沖縄を訪れるとは考えにくいと思われます。従って、観光客はまず沖縄という目的地を決定し、そこでの過ごし方の1つとして、サンゴ苗の移植作業を選択していると考えられます。つまり、移植作業よりも目的地が重視されており、最低限の技術で参加できるため、この事例は「浅い」ボランティア・ツーリズムといえます。



(出典) <http://www.seaseed.com/archives/category/gallery>
(downloaded on 2011.02.15)

写真-1 サンゴ苗の移植の様子

表-1 ボランティア・ツーリストの類型

	浅い (Shallow)	中程度 (Intermediate)	深い (Deep)
目的地の重要性	目的地が重要	プロジェクトと目的地の双方が重要	プロジェクトが重要
参加期間	短い 通常は4週間以下	中程度 通常は6ヶ月以下	中程度から長期 6ヶ月もしくはそれより短い期間の集中参加
体験目的：利他的か自分の興味か	自分の興味の重要性が利他的理由を上回る	利他的理由も自分の興味も重要	利他的理由の重要性が自分の興味を上回る
参加者の技術水準や資格に対する要件	最低限の技術または資格要件	一般的なスキルを提供するかもしれない	専門的技術や経験、時間を提供するかもしれない
能動的/受動的参加	より受動的な傾向	能動的な面と受動的な面が入り混じった参加	より能動的な傾向
地域への貢献度	地域への直接的な貢献は小さい	地域への直接的な貢献は中程度	地域への貢献は大きい

(出典) Callanan and Thomas (2005)

もう1つの事例は、2007年の能登半島地震で被害を受けた土蔵の修復を進めている、石川県輪島市のNPO法人輪島土蔵文化研究会の活動です。この活動では、左官技術を持った参加者による作業と一般参加者の作業がありますが、ここでは左官技術を持った参加者による作業に焦点を当ててみます。参加者にとっては、国内で少なくなった土壁を塗る作業を体験できる貴重な機会が提供されていることから(写真-2)、目的地よりも作業内容が重要です。参加者は技術習得という強い動機を持つと同時に、専門技術の提供者でもあるため、サンゴ保全活動の事例に比べると、より主催者と対等な立場でプロジェクトにかかわることができます。また、作業工程に従って数ヶ月にわたる活動が続けられることもあります。その意味で、この事例は「中程度」から「深い」ボランティア・ツーリズムと考えることができます。



写真-2 土蔵修復作業の様子

もちろん、「浅い」ボランティア・ツーリズムよりも「深い」ボランティア・ツーリズムが良いというわけではありません。これらに共通することは、これまで観光地では優れた地域資源を探し、それに磨きをかけることが重視されていましたが、ボランティア・ツーリズムでは地域活動の場そのものが観光資源になり得る一方、参加者も自己実現や社会貢献といった満足感を得るということです。

3. ボランティア・ツーリズムに関する研究の動向

ボランティア・ツーリズムに関する研究は、2000年代に入ってから徐々に蓄積が進みました。そのきっかけとなったのが、先ほど紹介したS. Wearingが2001年に出版した『Volunteer Tourism: Experiences that make a difference』という学術書でした。この学術書が他の研究者の注目を集めるようになり、2010年9月末までに48件のボランティア・ツーリズムに関する論文³が発表されています。

ボランティア・ツーリズムに関する研究の特徴として、ボランティア・ツーリストの体験や参加後の影響を分析した研究が18件と多いことがあげられます。その原因として、ボランティア・ツーリストが急増したことに対する社会的関心が高まったことや、自己実現や自己発見、社会貢献意欲など、ボランティア・ツーリズムが参加者に与える影響が、これまでの観光形態と異なっていると考えられたことなどがあります。ここで興味深いことは、地域社会への貢献という“利他的な動機”の有無について調査した研究の多くが、参加者の“利己的な動機”の重要性を結論にあげている点です。

また、ボランティア・ツーリズムの社会的意義や役割について論じた研究も多く見られます。具体的には、平和構築や社会活動への参加促進の手段としてボランティア・ツーリズムが取り上げられています。他にも、ホストとゲストのどちらかの文化が優位に立つ従来の観光ではなく、両者の文化が融合するボランティア・ツーリズムの可能性を論じた研究もあります。ボランティア・ツーリズムを通じて社会をどのように変革できるかということへの関心が高まっているといえます。

さらに、ボランティア・ツーリズムが個人や社会の変化を促すための具体的な方法についての提言も現れ始めました。例えば、ツアー終了後のネットワークづくりの重要性や、ツアー前後の積極的な学習の必要性などが指摘されています。

ただし、ボランティア・ツーリズムのこうした可能性を単純に認める研究ばかりではありません。例えば、ボランティア・ツーリズムでは個人は変化しないという議論や、ボランティア・ツーリズムはその場しのぎの解決策を提供する“立派な慈善活動”であって、社会的問題の根本的な解決をもたらすものではないという主張も見られます。いずれにしても、これらの議論はボランティア・ツーリズムに関する研究が蓄積過程にあることを示しています。ボランティア・ツーリズムが個人や社会を変革する可能性については研究者の関心が高く、今後も中心的な論点になっていくと考えられます。

³ 観光分野の主要な英文学術誌、ボランティア・ツーリズムの特集号を組んだ『Tourism and Recreation Research』、『Annals of Leisure Research』の2雑誌を対象に、volunteer tourism (voluntourism)、volunteer tourist (voluntourist)、volunteer vacation、volunteer holidaysがタイトルまたはキーワードに含まれている論文を抽出した。

4. “労働”と“余暇”が融合するしくみ

(1) NPO 法人モモンガくらの概要

これまで、ボランティア・ツーリズムの理論的な整理を行ってきました。最初に述べたように、ボランティア・ツーリズムは“労働”と“余暇”が融合した観光形態ですが、両者の融合を図っている興味深い事例が国内にあります。それは北海道登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」で活動を展開するNPO 法人登別自然活動支援組織モモンガくらぶです。

ふおれすと鉱山は、自然体験活動や環境学習を行っている市営施設です。モモンガくらぶは、ふおれすと鉱山の活動を支援する利用者の団体として2002年9月に発足し、現在約150名の会員がいます。発足当初はボランティアとして、ふおれすと鉱山が主催する活動を支援していましたが、2007年4月にふおれすと鉱山の指定管理者になったこともあり、現在は子育て支援や地域づくり、エコツアー事業など、さまざまな活動に広がっています（写真-3）。こうした活動を支えるしくみが「チーム」と呼ばれる会員のボランティア活動で、現在19のチームがあります。会員は、自分が所属するチームではサービスの提供者に、他のチーム活動に参加する時には利用者とともにサービスの受け手になります。人口約5万人の地域で、なぜこのような現象が起こっているのでしょうか。チーム活動が始まるプロセスをたどりながら、利用者がボランティア活動に積極的にかかわるしくみを見てみましょう。



(出典) http://npo-momonga.org/kouzan_gaiyou/sanka.html

(downloaded on 2011.02.10)

写真-3 モモンガくらぶが行っている活動の様子

(2) “労働”と“余暇”が融合するモモンガくらのチーム活動

ふおれすと鉱山には自然体験活動や環境学習を求めて、年間約25,000人の利用者が訪れています。ふおれすと鉱山に来ると、モモンガくらの有償スタッフが利用者に積極的に声をかけてきます。実際、ふおれすと鉱山の利用者に第一印象を尋ねると、「若いスタッフが多く、和気あいあいの様子であった」、「初めての人にも丁寧に対応してくれた」など、好意的な回答が多く見られます（田辺・森重 2009）。有償スタッフは利用者にただ親切に声をかけるだけではありません。利用者とのコミュニケーションを通じて、利用者が持っている問題意識や価値観、特技などを巧みに聞き出します。そして、同じような問題意識や問題解決に必要な特技を持っている他の利用者と結びつけていきます。こうして、数人の利用者の中で意気投合した時に、ある特定の活動を担う「チーム」が発足します。つまり、自然環境にかかわる場を通じて人びとが集まるきっかけをつくり出し、集まった人びとを結びつけることで、地域問題に対応したさまざまなボランティア活動を生み出しているのです。モモンガくらのコンセプトにも、“人と人がつながる、人と自然がつながる”が掲げられています。

さらに興味深いのは、チームで活動している会員の中には教員や保育士、ボーイスカウト指導者など、さまざまな職業・活動を行っている人びとがいますが、彼らの多くが職場で学んだ知識や活動で得た経験を利用してチーム活動にかかわっています。つまり、職場で金銭を得ながら行っていることと同じ活動を、休日に勧んでボランティアで行っているのです。そして、彼らはチーム活動を通じて、自己実現や社会貢献といった満足度を得て、自宅へ帰っていきます。

モモンガくらのチーム活動の事例から、“労働”と“余暇”が融合するボランティア・ツーリズムのヒントが見えてきます。つまり、他者から期待された労働や自ら主体的に取り組む労働であれば、余暇時間であっても喜んで引き受けるのかもしれませんが、しかも、ふおれすと鉱山は市街地から約10km離れた山間に立地しており、登別市民であっても日常生活圏から離れた印象を持つこととなります。この点については後述しますが、ボランティア・ツーリズムを捉える上で重要な要素になっていると考えられます。

5. 北陸地域におけるボランティア・ツーリズム～大地の芸術祭を支援する「こへび隊」

(1) 越後妻有「大地の芸術祭」と「こへび隊」

一方、北陸地域に目を向けると、前述した富山県旧大山町の「草刈十字軍」や石川県輪島市の土蔵修復活動など、さまざまなボランティア・ツーリズムが行われていることがわかります。そこで、本事業では越後妻有「大地の芸術祭」を支援する「こへび隊」を取り上げたいと思います。

越後妻有「大地の芸術祭」とは、十日町市および津南町で行われる「3年に1度の大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」です。大地の芸術祭では、地域内の集落もかかわりながら、自然や集落の固有性と結びついた、さまざまなアート作品が展示されます(写真-4)。2000年に第1回大地の芸術祭が開催されてから、2009年までに計4回開かれており、参加するアーティストや来場者数も増加傾向にあります。ちなみに、2009年7～9月に50日間開催された第4回大地の芸術祭では、参加アーティストが40ヶ国353組、来場者数が375,311人であったほか、地域内の約200集落のうち92集落がかかわりました。



(出典) 越後妻有里山協働機構提供資料

写真-4 大地の芸術祭での作品例

この大地の芸術祭の準備から撤去まで、アート管理やツアーガイド、イベント運営、メンテナンスなどのボランティア活動を行うために、都市部から訪れる若者のサポーターグループが「こへび隊」です(写真-5)。第4回大地の芸術祭が開催された時のこへび隊の登録者数は350名で、のべ3,244名(うち会期中はのべ1,925名)が活動にかかわりました。聞き取り調査によると、短い人は2～3日、長い人は1ヶ月程度滞在し、会期中は毎日80～120名のメンバーが地域に滞在していました。

当初は3年に1度の大地の芸術祭にかかわっていたこへび隊ですが、2008年にNPO法人越後妻有里



(出典) 越後妻有里山協働機構提供資料

写真-5 こへび隊による活動の様子

山協働機構が設立されて以降、大地の芸術祭が行われない年にも、こへび隊が地域で活躍する場が生まれました。最初はアート作品のメンテナンスが中心でしたが、集落で行われるイベントを手伝ったり、「棚田バンク⁴」の活動に参加して農作業に従事したりするなど、現在では地域住民とこへび隊がかかわる機会が広がっています。

(2) こへび隊が地域社会にもたらした効果

こへび隊の活動から、ボランティア・ツーリズムが地域社会にもたらす影響をいくつか見出すことができます。第1に、地域住民とボランティアの交流です。観光資源に乏しい地域であっても、ボランティア活動の場をつくり出すことで、新たな交流機会を創出できます。実際、こへび隊が作品管理を担当している時に、作品を見学に来た地域住民と会話したり、地元産品をいただいたりするなどの交流が見られます。こへび隊メンバーにとっては、実践的な学習や自己成長の場が与えられる一方、過疎化・高齢化の進む越後妻有地域にとっても、接する機会の少ない若者との交流は刺激になります。

第2に、大地の芸術祭を越えた活動の支援が徐々に広がっていることです。このことは、大地の芸術祭における一時的なにぎわい創出だけでなく、持続的な地域再生につながる可能性を持っています。例えば、こへび隊が盆踊りや小正月などの地域の行事に参加したり、棚田での米づくりにかかわったりすることで、地域の伝統や農業をあきらめていた地域住民に存続の希望が生まれています。

第3に、こへび隊メンバーの中からリピーターや移住者が少しずつ生まれていることです。もちろん、移住者はまだまだ少ないですが、リピーターも含めると、地域が活用できる人材が豊富になり、実質的に「人口増加」と同様の効果が得られ、地域再生の大きな力になります。また、こへび隊の活動そのものも充実し、より安定的・自律的な活動の推進も期待できます。

⁴ 棚田のオーナー制度で、田植えや稲刈りなどの活動に参加できるほか、収穫した米を受け取ることができる。

こへび隊の活動では、メンバーの1日あたり消費金額が1,000円程度であり、従来の観光に比べると決して経済効果が高いわけではありません。しかし、経済面では評価しづらいさまざまな波及効果が、受け入れ地域と参加者の双方に現れていることがわかります。

6. おわりに～ボランティア・ツーリズムは何をもたらすのか

これまで、ボランティア・ツーリズムを理論と実践の両面から調査・研究してきました。本事業は十分とはいえないものの、恐らく国内で初めてボランティア・ツーリズムを網羅的に整理した調査・研究でしょう。最後に、ボランティア・ツーリズムがもたらす可能性をまとめておきたいと思います。

第1に、“労働＝働くこと”の捉え方、すなわち労働観の変化です。近代化によって、働くことに対する労働者の主体性が次第に薄れ、労働は“主体的に取り組むもの”から“強いられるもの”へと変化していきました。しかし、モモンガくらぶやこへび隊の事例からも明らかのように、参加者が主体的に取り組む労働であれば、“余暇”の中でも十分生かすことができるということがわかりました。つまり、ボランティア・ツーリズムは労働に対する主体性をもう一度呼び起こし、労働と余暇の融合を図る可能性を持っているのです。

第2に、日常生活の利害関係から離れられるという特性です。日常生活ではさまざまな人間関係が形成され、たとえ善意でボランティアに参加したとしても、その意図が深読みされたり、一度始めると辞められなくなったりすることがあります。しかし、ボランティア・ツーリズムでは日常生活圏を離れているので、そうしたレッテルを気にせず活動にかかわることができます。北海道浜中町の霧多布湿原トラストのボランティア・ツーリズムを分析した依田(2010)は、日常とは違う気分転換や自己発見といった参加者のメリットを指摘しています。また、ボランティアを“続けなければならない”という重荷を感じる必要もなく、気軽にボランティアに参加できるという点もあげられます。

第3に、受け入れ地域にとっては、優れた地域資源や人材に乏しい地域であっても、ボランティア活動の場そのものが新たな観光資源になり、地域問題の解決につながる可能性をもたらします。一方、参加者にとっても、ボランティア・ツーリズムを通じて自己実現や社会貢献といった満足感を得ることができ、双方にメリットをもたらすこととなります。この点は先行研究でも指摘されていましたが、ボランティア・ツーリズムはホスト(＝受け入れ地域)とゲスト(＝参加者)の新たな関係を構築する観光形態として期待されています。

もちろん、ボランティア・ツーリズムを推進する上で課題がまったくないわけではありません。例えば、ボランティアを受け入れるには相当の準備が必要ですし、地域活性化の手段として必ずしも効率的とはいえません。また、ボランティア・ツーリズムがもたらす効果についても不確実性があります。しかし、それでもボランティア・ツーリズムが注目されているということは、交流を通じた楽しみや刺激といった経済面以外の大きな効果が期待できるからです。こうした多様な人びとがかかわる場こそ「創造の場」であり、ボランティア・ツーリズムは地域再生に向けた原動力となり得るのです。

【参考文献】

- Callanan, M. and Thomas, S. (2005) Volunteer Tourism: Deconstructing Volunteer Activities within a Dynamic Environment, M. Novelli, ed., *Niche Tourism: Contemporary Issues, Trends and Cases*, Butterworth-Heinemann, pp.183-200.
- Cousins, J. A. (2007) The Role of UK-based Conservation Tourism Operators, *Tourism Management*, 28(4), pp.1020-1030.
- 中村憲司・松本秀人・敷田麻実 (2008) 「労働」と観光が融合したボランティアツーリズムに関する研究『日本観光研究学会第23回全国大会学術論文集』pp.425-428.
- 田辺達也・森重昌之 (2009) 「自己実現の「場」の創出を通じた地域活動への積極的参加の可能性—北海道登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」を事例に」『日本計画行政学会第32回全国大会研究報告要旨集』, pp.67-70.
- Tourism Research and Marketing (2008) *Volunteer Tourism: A Global Analysis*, ATLAS, 83p.
- Wearing, S. (2001) *Volunteer Tourism: Experiences That Make a Difference*, CABI Publishing, 240p.
- Yoda, M. (2010) *Volunteer Tourism in Japan: Its Potential in Transforming “Non-volunteers” to Volunteers* (日本NPO学会第12回年次大会発表資料) <http://hdl.handle.net/2115/43183> (downloaded on 2011.03.04)

執筆：森重 昌之 (NPO 法人金沢創造都市フォーラム監事/株式会社計画情報研究所研究員)
依田 真美 (北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻博士後期課程)